

このたび原野のホームページに、杉山毅「緑の中の廃墟」読后感想文コーナーを開設しました。

<https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/MidorinonakaKanso.pdf>

一人でも多くの方のご寄稿をお願いします。2・3行のつぶやきでも長い感想文でも構いません。字数制限、提出期限なしで、随時受け付けます。原野までメールでお寄せください。nharano@hiroshima-u.ac.jp

「緑の中の廃墟」読后感想文

(下から到着順。短編集・杉山毅『緑の中の廃墟』には、「緑の中の廃墟」「復活祭の椿事」「アカシアの青島」「旗のある風景」「異郷の町にて」の5編が収録されている。以下の感想文は、「緑の中の廃墟」1編だけに関するものと、5編収録の『緑の中の廃墟』全体に関するものが混在している。)

6月20日の講義「オラドゥールの悲劇」を受講したあと、『緑の中の廃墟』を古書で購入し、改めて読んでみました。乱筆極まりない例の、やっつけ感想文を書いてしまったが為に、返って膨れあがった数々の想いに少しでも収まりをつけたい。そんな気持ちからでした。

講義の傍題は「広島からオラドゥールを考える-記憶の継承」であったと思いますが、この僅か30頁足らずの貴い手記をゆっくり噛み砕いたあとごく自然に、オラドゥールから広島、現在の日本を考えていたのでした。

オラドゥールの廃墟の、沈黙と想起を求めるまっすぐな訴えは、その場に赴かずとも、匂いたつ魂のようなものを感じさせ、そのまま胸に突き刺さる思いがしました。

“Souviens-toi”直訳すると「思い出して」「忘れないで」となります。しかし、フランス語特有の文法のゆえか、わたしには、「自ら思い起こすべき」とでもいうような響きをもって感じられました。誰に指示されるでもなく、あたかも自然発生的に芽生えた自らの感情であるかのように働きかけるこの言葉に胸を刺されたのは、オラドゥールの悲惨さを肌身に感じたことのみには拠るものではなく、現代に生きるわたしたちに投げかけられた謂わばミッションのようなものを感じられたからです。

戦後、持ち前の勤勉な国民気質をして飛躍的な経済発展を遂げた日本。そのお陰でわたしたちは豊かで文化的な生活のなかで生きてきました。広島で生まれたわたしさえ、祖父母の生きていた時代に戦争があって、原爆が落ちた日のこと、小さい時から何度聞かされても、どれだけ想像してみても、元安川を、相生通りを歩いて当時の焼け野原に皮膚がただれた人、真っ黒に焦げた人たちが息絶えた惨状の街を頭の中で再現しても、何不自由なく機能する穏やかな街のなかでは、身震いが起きるような感覚から遠く存在する自分を、頼りなく確認するだけでした。

しかしなぜ当時の悲惨な状況を感じようとし、理解しようとしたのか？それはやはり、かつて犠牲となった祖父母世代の悔恨を色濃く残したまま繋いでいかなければならないという、ごくまじめな気持ちがあったからだと思うのです。けれど、著書に挙げられているパスカルの例や、補修されたドームが物語っているように、人は当事者でない限り、枯れた葉が落ちていくように、それが風に吹かれて消えてしまうように忘れ去って

いく。そう思います。ただ、わたしたちにしかないものといえば、それは、先祖たちの経験によって多くを学ばせてもらったこと。これは、わたしたちにとって大きな財産だと思っています。

わたしの家は爆心地からおよそ 5km 離れたところにあり、被害が大きくてた 3km 圏内から外れていた為もあって、祖母は幸いにも無傷で、祖父は戦地にいましたので被爆していません。しかし広島で育ったことで、原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、人間の愚かさについて多くの話を聞き、それなりに考える機会を与えられていたのではないかと思います。

実際、小学生になると毎年 8 月に平和学習なるものが実施され、被爆された方たちから直接お話しを聞く機会があったり、原爆資料館を訪ねたりしながら、様々な事を学んでいくのですが、わたしは父の転勤で広島を離れていた時期があり、ちょうどその好機を逃しています。ただ、わたしにとって初めての平和学習なるものは小学 2 年の時、中沢啓治によって描かれた漫画「はだしのゲン」との出会いによって、早々に幕が切られたのです。全 10 巻ほどの漫画を学校の図書室で借りて読んでは、悔しさ、行き場のない憤りに押しつぶされそうになりながらも、涙しながら読み漁りました。主人公のゲンが、当時のわたしと同じ年の設定であったためか、見開き再生パルプ紙のなかの世界で疑似体験を繰り返していた、と言えるのかもしれませんが。

そのなかでとくに影響を受けた登場人物、主人公ゲンの父。彼は戦時中において非国民と言われた、戦争反対を信条とする人として描かれていました。酷い拷問にあっても、牢屋に入れられ罪人扱いをされても、決して屈することなく「日本は戦争に負ける。戦争が終わったら良い時代がやってくる。」そう言い続けていました。その姿は、当時のわたしの胸に深く刻まれてしまったようです。単に、左翼的思想がどうの、その対極であるとかそんなことでは無く、“自分の考えを軸に生きているかどうか？”という、ごくシンプルだけれども、とても大切なことをわたしに教えてくれました。それは常に目の前に立ちほだかり、わたしはそんなふうにいるだろうか。その後の人生において自問を繰り返すことになったのでした。生来臆病なわたしが、その問いに満足できたことは未だないのかも知れませんが。

7 年前の東日本大震災で福島原発から放射能が漏れてから、福島の特産品は売れなくなりました。それはとても自然な成り行きのように思えました。人には危険なものを回避する遺伝子が備わっていると言われてるように、より良いものを求めて生きていこうとするものです。しかし、この放射能という言葉は、わたしたち広島に住む者にとってはどこか身近にさえ感じる聞き慣れた言葉です。ただしそこから喚起されるもののなかには、人体に悪影響をもたらすもの。という事ともう一つ、大量の放射線を浴びて被爆した人たちが受けた差別や苦しい思い、その憤りをも、この単語が意味するようにも思えるのです。

当時、母が桃が安くなっていたからといって 1 ケース買って来たことがありました。母は福島産のものであることを知らずに買って来たようだったのですが、まだ小さな孫もいたこともあってか、家族の反応は様々でした。ただ兄はひとり、「これまで美味しいといって食べてきた桃を放射能の影響があるかもしれんけえいうて食べんわけにはいかんだろう」と言ったと聞いて、わたしは、ゲンの父親に感じたときのような気持ちをふと思い出しました。それと同時に、この発言からおそらくこの広島という土地で育ってきたものとしての小さな宿命のようなものを無意識にも背負っているように感じられました。

今年立て続けに起こった天災の被害となった人たちの言葉にできないほどの個人的体験、著者の広島の居住者となったことから始まった体験、わたしのように広島生まれ

という者でさえも、大小様々であっても誰もが宿命というものをもっていて、自ずとその宿命に添って生きているのではないか？影響力の差こそあれ、それぞれが、それぞれの役目を背負って生きているように思われました。緑の中の廃墟が書かれてから40年以上経った今、世界は絶えず変化を続けてきました。日本と他国の関係も変わりつつあります。そのなかでわたしたちは立ち止まっているわけにはいかず、前に進まなければなりません。この著書を読み、そして改めて戦争という悲劇が残していった遺産とどのようにつきあっていけばよいのか？という曖昧にしてきた思いに何か新しい風が舞い込んできたような気持ちでいます。“答え”はないのだろうと思います。ただ、忘却を恐れず、わたしたちにできるやり方で平和を繋いで行くことはできるのではないか、そんな熱い気持ちが込み上がってきました。そこに挑戦していくことが、心の中に滅びぬドームを築くことなのかも知れません。わたし自身、たくさん恥をかかせていただける場に感謝しつつ、ささやかながらも前進していけたらとおもっています。ありがとうございました。

(C. Y. / 「コミュニティ・アカデミー上幟」において、学習旅行「フランス南西部への旅」の事前学習講座「フランス南西部を学ぶ」を実施した。その第1回が「オラドゥールの悲劇－広島からオラドゥールを考える。記憶の継承」と題するものであった。毎回講義の最後にA5用紙1枚に感想文を書いているが、本稿はそのとき時間足らずのまま提出された感想文の補足である。) 【2018.10.10】

原野先生のブログに掲載されている杉山先生の「緑の中の廃墟」を友人から教えられ拝読させていただきました。

オラドゥールの殺戮と広島・長崎の原爆、そして沖縄戦に違いはあるのでしょうか？犠牲者の数、歴史的なスケールは違いますが、これらの悲劇、それが個人にもたらす重さは私には同じであるように思えます。

フランスでは、学校の歴史の授業やテレビでオラドゥールは史実として必ず取り上げられるものの、一般的にフランス人にとってオラドゥールは、ロミー・シュナイダーとフィリップ・ノワレの1975年のフィクション映画「**Le vieux fusil**」(ご存知かと思いますが、邦題「追想」)のイメージといえるでしょう。オラドゥールの悲劇をモチーフにしたフィクションです。

([https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%BD%E6%83%B3_\(1975%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%BD%E6%83%B3_(1975%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB)) 及び https://fr.wikipedia.org/wiki/Le_Vieux_Fusil 参照)

沖縄在住のK.O.さんがお寄せになっている感想のなかで、イタリア人のご友人に「なぜ沖縄の人間はもっと怒らないんだ」と問われとありましたが、この映画「追想」にその答えがあるように思います。フランス(西洋)では、オラドゥールのような悲劇を記憶に残すために、フィクション化することで怒りを持ち続けようとしています。実際は、映画のストーリーにあるような死者たちのための復讐や敵討ちは行われていません。しかし、犠牲者の遺族でないにしても、この映画のほとんどの観客は、怒りにかられます。

怒り、つまり『悪者を殺す』願望を抱きます。もちろん実際には、誰もそのようなことは行いませんでしたし、これからも行われることはないでしょう。ですが、この願望がこのストーリーの「美しい」結末となって残るのです。

ここで、「だけど、それはキリスト教的な考え方ではないのでは？」と指摘を受けるでしょう。まさしく。たしかに、一般的なフランス文化やキリスト教的思考とは結びつきません。個人レベルでは、キリスト教的な考えは働きません。復讐の感情が点灯されるのです。

一方、オラドゥールの殺戮以来、オラドゥール村の正式標語と紋章が改められ、そこにはこの悲劇の記憶が刻まれています。

(<https://fr.wikipedia.org/wiki/Oradour-sur-Glane>) オラドゥールの現在の紋章は、一目でキリスト教のシンボルであることがわかります。その標語は、「憎まない、忘れない」となっています。集合体レベルでは、国としてのドイツ に対する恨みを否定すべく、キリスト教の精神をかかげています。しかしながら、個人レベルでは異なります。

西洋的な個人レベルと集合体レベルの記憶の在り方は、日本（広島・長崎）や沖縄とは異なります。もちろん、どちらが良いというものではありません。前述のイタリア人あるいは西洋人全般に、広島・長崎の原爆投下、そして沖縄戦への怒りが足りないように見える（あるいは怒りが見えていない）のは、彼ら自身の記憶の在り方との違いに起因しているのかもしれない。

すいません。まとまっていませんが、きりがないのでこのへんでやめておきます。

ご参考までに。

コンクとオラドゥール の間（200～250 キロの距離）には、1944 年の 5 月から 6 月にかけて第二 SS 走行師団ダス・ライヒが通過した多くの村や町があります。オラドゥールの殺戮の前に多くの犠牲者を出しました。各村や町にはこの出来事を記憶するモニュメントが設置されています。

原野先生の「フランス南西部への旅」のバスはフィジャック（448 名逮捕）とロカマドゥール間の県道 840 号に沿って、ル・ブール（13 名逮捕）を通るかと思えます。グラマの手前で左側に« Monument Martyr de Gabaudet »（ガボデの受難碑）という標識が見えてくるでしょう。ガボデはオラドゥールよりは知られていませんが、同じダス・ライヒ師団（ヴィシー政権のフランス人憲兵数人を含む）がオラドゥールに到着する数日前にそこで 40 人余りを殺害しています。

(<https://fr.wikipedia.org/wiki/Issendolus>)

(P. H., パリ在住 / 下の方にあるフランス語でのご寄稿[15 août 2018]を、ご本人が超多忙の時間を割いて日本語に訳してくださったもの) 【2018.9.17】

『緑の中の廃墟』は、大学 3 年生の時に杉山先生から在学生の皆がいただきました。大学入学によって広島の居住者になった私は、広島では新聞やテレビで折に触れて原爆関係のニュースがあることに気づき、それまであまりそのことについて考えてこなかった

たこと、ニュースに接しても戸惑うだけで思考停止している自分に、後ろめたいような気持ちを抱いていました。

今回読み返して、「緑の中の廃墟」の「広島居住者」という言葉に共感して読んだこと、教壇でお見掛けする杉山先生は威風堂々としていらして、「緑の中の廃墟」の「私」と杉山先生を混同し不思議な気がしたことを、思い出しました。

その後福井県に転居し、この地では、原発関係のニュースが多く流れます。そしてまた、自分を関係者や従事者でなく「居住者」にすぎないと思っていることに後ろめたいような気持ちを抱いています。

普段あまり考えないようにしていること、でも考えてしまうこと、どう考えたらいいかよく分からないこと、について投げかけられた本でした。

(H. H. / 原野宛私信メールの一部を抜粋) 【2018.9.15】

この夏はバルトークの「弦楽のためのディヴェルティメント」を練習する日々です。この曲を書いた時、作曲家は亡命を決意していたそうです。ナチスがヨーロッパを席卷しつつあった時代でした。

故郷ハンガリーの民族音楽を集め、ヨーロッパの音楽家として活躍したバルトーク。亡命はいかに無念だったことでしょう。

演奏することは、どこかその人の内面世界に入ることでもあって、この曲の場合は、皮膚が灼けつくような緊張感や切ない懐かしさを通らさずには済まされません。

これもまた第2次世界大戦の遺した傷痕のひとつ。

さて『緑の中の廃墟』を私は初めて読みました。

広島のマツダ氏は、自分の「戦争体験」と向き合い、また他人の心の傷に出会いつつ、「私とは誰なのか」と自ら問い続ける声に応える何ものかを獲得するに至ったのでしょうか。

何年もかかって書き継がれた、この連作の中で、彼は常に他者から見た自分がやはり他者である、この違和感と共に生きつつ、他人の傷をもまた共有していくように私には思えます。例えば被爆者としてABCCの「調査対象」となった「田舎人」の手紙に心を痛み、大学に赴任してきたフランス人教師の身の上を気遣い、自分自身の幼年期を回想して、青島の中国人たちの境遇を改めて思いやるというように。

オラドゥールの立て札 <Silence !> <Souviens-Toi> の前に立ったことから、マツダ氏の心の旅が始まったのであれば、「広島居住者」である私もその場所に立ってみたいと考えたのでした。

(M. S. / 原野宛私信メールの一部を抜粋) 【2018.8.29】

『緑の中の廃墟』読みました。この本を教えてくださいありがとうございます。そうでなければ読むことも知ることもなかったと思います。いつもありがとうございます。

「オラドゥールの悲劇」も知りませんでした。漫然と眺めていたパリからボルドーへ行く TGV の車窓のむこうにその村があったのです。Dデーの四日後に報復としてドイツ軍に村が焼かれ、村民が惨殺されたこと。知らないで生きる生き方の薄さに気づかされ唾然とします。

広島についても、「ヒロシマの居住者」ではありませんが、「戦争が終わって僕らは生まれた」と歌うフォークソングのタイトル「戦争を知らない子供たち」です。

広島に住んでいた時、平和運動の真似事をしたことがあります。原爆でなくなった大叔父や入市被爆の祖父を語りながら。一主婦が平和について考えようとした時、「党派性むき出しの平和運動」は窮屈でした。

総懺悔では能わない加害者でも被害者でもある戦争。très très 微力で非力ですがアンテナをたて直したいと思います。

杉山先生は『愛と死の手紙』の訳者ですね。「復活祭の椿事」にその映画「愛のために死す」がでてきますね。ボルドー裁判でムルソーが弁護士の頭に浮かぶ場面もあります。教授の「ホモ・ルーデンス」の部分を加味されたエッセーふうの「小説」は、そう言うことが許されるならば、面白かったです。

「来年はアルザス地方に行こうかと」とおっしゃったのが、今解ると思います。もう一度、Bon voyage！ どうぞお気をつけて。

(H. K. / 原野宛私信メールの一部を抜粋) 【2018.8.26】

Une amie commune m'a parlé du texte du Pr. Sugiyama sur « Le massacre d'Oradour » sur votre blog, que j'ai lu avec grand intérêt.

Y a-t-il une différence entre le massacre d'Oradour et la bombe atomique sur Hiroshima ? Ou la Bataille d'Okinawa ? Le nombre des victimes est différent, la portée historique des événements est sans doute différente, mais les événements eux-mêmes et leur signification humaine sont assez proches, il me semble.

On parle encore régulièrement d'Oradour en France dans les écoles et à la télé, mais je crois que l'image qu'en ont la majorité des gens vient du film *Le vieux fusil*, un film de fiction de 1975, avec Philippe Noiret et Romy Schneider (« 追想」 en japonais, vous le connaissez certainement), construit sur les événements d'Oradour.

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%BD%E6%83%B3_\(1975%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%BD%E6%83%B3_(1975%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB)) et https://fr.wikipedia.org/wiki/Le_Vieux_Fusil

K.O., qui commente votre blog, parle d'un ami italien qui s'étonne « Pourquoi les Okinawaïens ne sont-ils pas plus en colère ? ». Je crois que ce film *Le vieux fusil* permet de répondre à cette question. En France (et en Occident), quand on veut travailler sur la mémoire d'un événement tragique comme Oradour, on invente une fiction pour entretenir la colère : personne n'a vengé les morts d'Oradour comme dans le film, mais pour tous les spectateurs du film, même ceux qui n'ont pas de famille dans les victimes, on entretient la colère, c'est-à-dire le « rêve » de tuer les méchants. Personne ne l'a fait, personne ne le fera, mais ça reste comme la « belle » fin de cette histoire.

« Mais ce n'est pas une façon de penser chrétienne... » me fait remarquer ma femme. Exact. Ça n'a rien à voir avec la pensée chrétienne par ailleurs majoritaire et commune de la culture française. Au niveau individuel, la pensée chrétienne n'est pas appliquée. C'est la notion de vengeance qui est activée.

En revanche, depuis le massacre d'Oradour, le logo et la devise d'Oradour ont été changés pour

marquer la mémoire de ces événements. <https://fr.wikipedia.org/wiki/Oradour-sur-Glane> Le blason actuel d'Oradour est incontestablement de symbolique chrétienne. Et la devise est : « Ni haine, ni oubli ». Au niveau collectif, on met en avant l'esprit chrétien pour refuser la haine contre l'Allemagne en tant que concept. Mais au niveau individuel, c'est différent.

C'est cette façon de gérer la mémoire, individuelle et collective, qui est différente au Japon et à Okinawa. Je ne dis pas que l'une est bonne, l'autre mauvaise, bien sûr. Mais les Italiens ou les Occidentaux qui ont du mal à comprendre pourquoi les Japonais ou les Okinawaïens n'ont pas de colère (apparente) contre les massacreurs de la bataille d'Okinawa ou les lanceurs de bombes sur Hiroshima et Nagasaki croient simplement que leur façon de garder la mémoire est la seule possible.

Bon, ça va devenir trop long, pardon.
J'arrête là.

Entre Conques et Oradour (il y a environ 200-250 km entre les deux), entre mai et juin 1944, la division Das Reich a traversé de nombreuses villes et villages. Très souvent, ils ont déjà arrêté et assassiné des civils, et chaque village possède un monument pour garder la mémoire de ces faits.

Quand votre bus passera entre Figeac (448 personnes ont été arrêtées) et Rocamadour, sur la RD 840, après le village du Bourg (13 personnes arrêtées) et avant Gramat, vous verrez peut-être un panneau indiquant « Monument Martyr de Gabaudet ». Gabaudet est moins connu qu'Oradour, mais quelques jours avant Oradour, les mêmes troupes allemandes aidées par des troupes françaises de Vichy ont massacré une quarantaine de personnes.

<https://fr.wikipedia.org/wiki/Issendolus>

(P. H., Paris / Une partie du mail privé adressé à M. Harano) 【15 août 2018】

K.O. 様

教えていただいた原野先生のホームページから杉山毅先生の「緑の中の廃墟」を早速読まさせていただきました。

以前読んだ小説で、オラドゥールが舞台ではなかったかもしれませんが、春から夏は緑に覆われ、冬は雪に埋もれたた無言の廃墟というのが出てきて印象深く残っていたのが思い出されました。

フランスのとある地方出身の友人が、どこだったかは忘れましたが、村人のほとんどが亡くなったという場所に鎮魂祭で帰省していたことなども重なってきます。ユダヤ系の年上の友人は子供や孫には決して語りたくないという話を外国人、第三者である私にはポツポツと語ることがあります。

若かりし頃いた Aix-en-Provence で、いつも柔和な表情のカンボジア人男子学生がいて、聞くと、家族を失った難民とわかり、そのやさしい目の奥にあるすさまじい経験を想像して言葉が継げませんでした。

旧ユーゴスラビア出身者が集まっていたグループがあったり、ユダヤ系、アラブ系、イスラム系、アフリカ系・クレオール系旧植民地出身者・・・

平和ボケしてバブルに浮かれていた日本との距離を感じたものです。

この夏は、そのようなことへもつらつらと思いを巡らせながら、戦争や平和について考えています。

(Y. M. パリ在住 / K. O.さんへの私信の一部を抜粋) 【2018.8.14】

オラドゥールについて全く知りませんでした。先生が前のメールにつけてくださったリンクも見せていただき、杉山毅先生の「緑の中の廃墟」を読ませていただき、大変感動いたしました。戦後70年しか経っていないのにもう「戦争を繰り返さない」という誓いを忘れていて政治家たちに呆れる毎日ですが、戦後30年に杉山先生はすでに同じことを考えておられたのです。沖縄のことにも言及しておられましたが、沖縄に住むヤマトンチュのわれわれにも沖縄の人々の本当の苦しみがわかるかという問いは常に突きつけられています。私も戦争反対、基地反対といいながら、さりとは何か行動しているか問われると県民集会に出るぐらいのことしかやっておらず、沖縄に住んでいたイタリア人の友人にも「なぜ沖縄の人間はもっと怒らないんだ」と問われて返す言葉がなかったり。色々な人に読んでもらいたいエッセイです。先生がフランス南西部の旅で、とくに広島の方々と一緒にオラドゥールに行かれるのは大変意味深いことだと思いました。

(K. O. / 原野宛私信メールの一部を抜粋) 【2018.8.7】
